

# 豊田市民芸館だより



青佳(本多静雄)肖像 1997年 油彩・カンヴァス 60.0×46.5cm

## 目次

- ・企画展 ふたつのコレクション展  
「芹沢銈介の仕事」「筆と言葉 杉本健吉と  
本多静雄の交流」の見どころ ..... 2・3頁
- ・「鈴木繁男 手と眼の創作」展を終えて ..... 4頁
- ・青井東平とバーナード・リーチの素描 ..... 5頁
- ・本多記念民芸の森から ..... 6頁
- ・令和8年度展覧会のご案内 ..... 7頁
- ・民芸館からのお知らせ ..... 8頁

第40号

当館では5月24日（日）まで、企画展「ふたつのコレクション」を開催し、収蔵資料から厳選した作品群をご紹介します。今回は、ふたつの展覧会の共通点や見どころを中心にご案内します。

### ■ 芹沢銈介と杉本健吉の共通点

本多静雄は、1988年（昭和63）に丸栄百貨店で開かれた芹沢銈介展に以下の紹介文を寄せています。

「図案の美

私の敬愛する芸術作家に『絵』の杉本健吉さんと、『染』の芹沢銈介さんがいます。どちらも色彩と形象に対する優れた感覚を持ち、その作品は多くの人々の共感と称賛を得ています。（中略）二人はもともと図案家です。」

本多は、図案家としての二人の作品を高く評価していました。当時、名古屋では世界デザイン博覧会（通称・名古屋デザイン博）が開催される直前で、本多は紹介文の最後に、「図案」が「デザイン」とカタカナになったことを述べつつ、人々が図案の効用と美を認識する世の中になったことを喜んでいます。

「図案」という言葉は明治政府によって生み出された官製造語です。この背景には、産業振興を目的としたデザイン教育が官主導で推進されたことがあります。1896年（明治29）、東京美術学校（現・東京藝術大学）に「図案科」が創設され、その後、全国の高等教育機関に広がりました。芹沢銈介は1916年に東京高等工業学校（現：東京科学大学）工業図案科を卒業し、杉本健吉も愛知県立工業学校（現：県立愛知総合工科高校）図案科を卒業しています。図案科はその後、多くの学校でデザイン科に名称が変更されました。当時の「図案」と現代の「デザイン」の概念の違いについては、デザイン史や工芸史において研究されていますが、芹沢銈介と杉本健吉は、図案家として本多の言う「図案の効用」を活かしつつ、自身の作品で美を存分に表現していることが印象的です。

### ■ 図案（デザイン）にまつわるふたりの言葉

「デザインとは流動するもので、初めから決めてかかるものではない」

芹沢銈介は、1976年（昭和51）にフランス政府から招聘され、日本人として初めて〈グラン・パレ〉で個展を開催した際、自身のデザインに対する考えを上記のように語っています。紅型（型染）を追究するなかで、「下絵」・「型彫り」・「染」というすべての工程を一人で担い、自らの染色表現を深めていった芹沢は、下絵の線がずれても意に介さず、紙を切り過ぎてしまった場合でも、それを生かして図柄を作り上げていったといいます。偶然を受け入れながら創作に向かうその姿勢が、遊び心のある構図や豊かな配色、味わい深い作品を生み出したとされています。さらに、芹沢が目指したデザインのあり方を損なうことなく、ひとりの制作では届かない量と広がりを実現するために設立されたのが芹沢染紙研究所でした。これにより、芹沢の作品はより多くの人々のもとへ届き、長く愛され続けることとなります。このとき芹沢が述べた「デザイン」とは、単なる図案（下図）にとどまらず、意匠や制作工程など作品をかたちづくる全ての要素を含む概念であったように思われます。

「図案家かな。今で言うならばグラフィックデザイナー。絵は好きで描いています。」

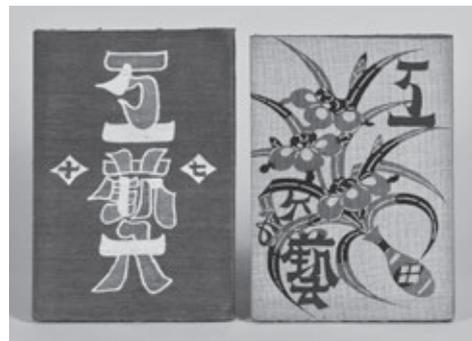
（後年、職業を問われた際の杉本健吉の言葉）

『生きることは描くこと 杉本健吉評伝』（木本文平著）によると、杉本健吉は幼少期から画家になることを夢見ていましたが、周囲の勧めにより、愛知県立工業学校図案科に進学しました。図案科のカリキュラムには、図案の基礎技術実習に加えて絵画制作も含まれており、絵画描法を学ぶ機会もあったといいます。卒業後、当時多くの若者に影響を与えていた画家・岸田劉生に師事することを許され、劉生が亡くなるまでの約4年間、本格的な指導を受けました。一方で、卒業後は会社員として図案や看板、装飾などの仕事に携わり、その後、図案家として独立します。

図案家として生活基盤を確立したのちも、愛知県内の美術団体や、全国的な知名度をもつ国画会への入選を重ね、画家としての地位を着実に築いていきました。杉本の言葉には、画家としての作品と同等に自身の図案家としての作品に向けられた深い愛を感じます。

## ■ 図案家として評価されるふたりの作品

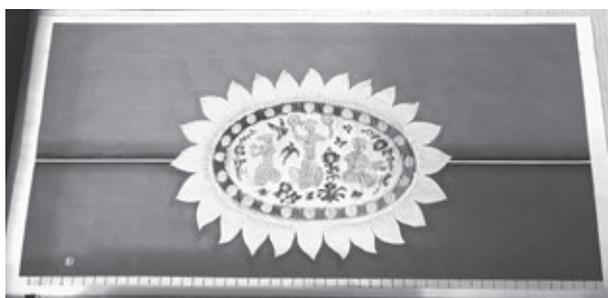
芹沢銈介は、生涯に500冊以上の装幀を手がけたといわれています。その原点であり、代表作のひとつが雑誌『工藝』です。芹沢は柳宗悦に請われ、1931年（昭和6）、創刊号から第12号までの1年分を、3号ごとに図柄を変えて制作しました。当時、芹沢の近所に住んでいた医師であり、民藝運動の参画者でもあった式場隆三郎は、毎月500～600部もの布をムラなく染め上げる工程を通して、芹沢が「工芸的な工人の意義をのみこんだ」と指摘しています。芹沢自身もまた、雑誌『工藝』の仕事について、初めて手掛けた量の仕事が、その後の自分にとって大きな力となったことを回想しています。本展では、雑誌『工藝』をはじめ、数々の装幀の中から厳選した作品を展示します。



雑誌『工藝』70号[左] / [右] 65号  
いずれも1936年 22.0×15.0cm

杉本健吉を一躍世に知らしめた作品として、1950年（昭和25）から1957年（昭和32）の完結まで、7年にわたり描き続けられた、週刊朝日連載・吉川英治作『新平家物語』の挿絵があります。この仕事は、前任者である前田青邨、守屋多々志という当時を代表する日本画家たちから引き継がれたものでした。

本展では、『新平家物語』の挿絵による貼り交ぜ屏風を（公財）杉本美術館の厚意によりお借りし展示します。また、杉本健吉の図案家としての仕事のなかには、私たち豊田市民にとって身近な作品があります。杉本は市政30周年記念事業の一環として、1981年（昭和56）に完成した市民文化会館大ホール第1緞帳「太陽の華」の図案を制作しました。本展では、これまで公開されることのなかった緞帳の原画を展示します。折しも今年度は、市民文化会館が開館50年を迎える節目の年にあたります。この機会にぜひご覧ください。さらに杉本は、この緞帳幕のほかに、本多静雄の求めに応じ、平戸橋の本多邸内に設けられていた狂言舞台の鏡板を制作しています。この狂言舞台は、本多が主催する「陶器と桜を観る会」で用いられてきましたが、2016年（平成28）からは「民芸の森」として、10年にわたりイベントに活用されています。会期中の5月23日



緞帳原画（太陽の華）1975年頃 54.8×111.5cm



鏡板 老松 1977年 211.0×528.0cm

（土）・24日（日）には、狂言舞台にて展示を行います。また、24日（日）には、本多記念民芸の森オープン10周年を記念して名古屋狂言共同社による本多静雄の創作狂言「三国山」の公演を予定しています。

## ■ 百年人生を歩んだ先駆者たち

### 「86歳誕生日の肖像」

展示室冒頭には、芹沢銈介の86歳の誕生日会に撮影された肖像写真を展示しています。この誕生日会では、弟子や教室の生徒らによる屋台や催しものが行われ、芹沢は自身が蒐集した衣装を着てお披露目したそうです。芹沢を慕い集う様子が想像できます。今なお多くの弟子たちが活躍していることが伺える出来事です。

### 「333歳老夫婦二組 地球一周十一日間の旅（1987年11月6日—16日）」

1987年（昭和62）の暮れ、本多夫妻は、懇意にしていた杉本夫妻を誘い、地球一周の旅に出かけました。この旅の名称を考案したのは本多で、四人の年齢を合計すると333歳になることに由来しています。この旅の記録は、本多の手記と杉本の絵によって構成され「地球一周絵のある旅」と題し、中日新聞夕刊（1988年1月4日—16日）に連載されました。のちに同名の書籍として刊行されています。本展では、それらの原画を展示します。晩年の二人は、関心や好奇心のおもむくままに行動し、互いの創作意欲を刺激し合う特別な関係にありました。人生の最終章においてもなお瑞々しい感性を保ち続けた二人の親交から生まれた作品の数々をご覧ください。（梅村 美紀子）

参考文献：『芹沢銈介八十八年の軌跡』静岡市立芹沢銈介美術館 2025年  
『生きることは描くこと 杉本健吉許伝』木本文平 求龍堂 2010年  
『民芸彷徨』本多静雄 矢作新報社 1990年

# 「鈴木繁男 手と眼の創作」展を終えて

2025年10月11日（土）から2026年1月12日（月・祝）の会期で「鈴木繁男 手と眼の創作」展を開催しました。この展覧会は、東京の日本民藝館で2023年度に開催された同名の展覧会を再構成したものでした。鈴木繁男（1914-2003）は民藝運動の主唱者である柳宗悦の唯一の内弟子で、柳から直接工芸や直観についての指導を受け、日本民藝館の展示や収集、さらには日本の民藝運動全般に大きな足跡を残した工芸作家です。展覧会のサブタイトルになっている「手と眼の創作」とは、秀逸な技巧を我がものとした工芸作家としての側面だけではなく、鋭い鑑識眼を具えた蒐集家としての鈴木にも光を当てようとすることを含意するものです。

金蒔絵師の次男として静岡市に生まれた鈴木繁男（1914-2003）は、幼少期から漆芸を仕込まれ模様生む能力を育んでいきました。その非凡な才能をいち早く認めた柳宗悦は1935年に鈴木を入門させます。すぐに柳から工芸や直観についての厳しい指導が始まり、また同時に、開館前の日本民藝館陳列ケースや展示台への拭き漆塗りなどを任されました。鈴木の仕事が初めて衆目を集めたのは雑誌『工藝』の装幀で、和紙に漆で描かれたその表紙は、多くの民藝関係者や読者を驚かせました。1937年の73号から1942年の108号まで続いたこの装幀の仕事は柳も高く評価し、自身の創案によりそれらの表紙を六曲一双の屏風に仕立てたほどです。また、この時期には早くも作陶の仕事にもかかわっています。日本民藝協会同人による沖縄渡航の費用調達を目的として1939年末に開催された展覧会に出品するためでした。もともと沖縄・壺屋の素地に芹沢銈介が上絵を施すための助手として柳の指示により芹沢のもとへ派遣されたのですが、展覧会の直前になっても手つかずの素地が残っていたため、芹沢から鈴木も自分で絵付けをするように依頼されて描いたのでした。そこに見られる流麗でありながら力強い文様からは、鈴木が才能の一端と作陶に関わった喜びとが伝わってきます。

一方、眼による創作も早い時期から行われており、1938年には自身の眼で蒐集した「厨子」を日本民藝館へ寄贈

しています。柳は『工藝』89号の「寄附報告」でこの厨子に触れ、その健やかな美を称えるところに鈴木への謝意も述べています。入門してわずか3年のことですが、鈴木は観る力が短期間に高まったことを表わす出来事です。

陶磁器、装幀など多岐にわたる鈴木作品の特質は、筆や型を用いて施された模様の独自性にあります。古今の工芸品から滋養分を受け取り、それを十分に咀嚼して生み出した品格ある模様は、燦然たる光彩を放っています。鈴木はその後も精力的に制作に打ち込み、数々の優品を生み出しました。また、柳に鍛えられた眼による創作もますます円熟味を増し、鈴木が蒐集した古作の優品は日本民藝館のコレクションの中で確かな位置を占めています。

会期中には、朝倉圭一氏によるトーク、柴田雅章氏による記念講演会も行われました。朝倉氏は民藝の品々を届ける立場から身近な話題も交えたお話で楽しませていただきました。一方、柴田氏は、鈴木繁男からまさに「薫陶を受けた」作陶家で、大阪日本民芸館の展示を鈴木から任せられたりもしました。鈴木繁男をよく知る柴田氏の講演は、聴衆の心に響き、作家への理解、展覧会への興味を深いものへと誘っていただきました。

本展は、これまで認知されることの少なかった工芸家・鈴木繁男の手と眼による創作を展覧し、約半世紀にわたる多彩な仕事を紹介しました。4

回行ったギャラリートークや充実した講演会などによっても、鈴木繁男という作家を改めて知る機会を提供することができた展覧会でした。

（北谷 正雄）



【呉須打掛皿】1955-1959年



【南无阿弥陀仏】1955年  
（柳宗悦著、特装本）



【灰釉蓮弁文壺】平安時代末期



【工藝】第81号 1937年



【色絵草花文皿】1939年



【厨子】江戸時代



柴田雅章氏講演会

# 青井東平とバーナード・リーチの素描

令和6年度、青井東平のご息女より、青井の蒐集品をご寄贈いただきました。青井は名古屋民藝協会の初期の活動に大きく関わった人物で、この寄贈資料に含まれる、河井寛次郎、富本憲吉、島岡達三、鈴木繁男、上田恒次、河井博次、バーナード・リーチ、片野元彦らの作品からも、その交流の広さがうかがえます。令和8年1月12日まで開催していた「鈴木繁男 手と眼の創作」展では、その関連展示として、青井の蒐集品である、鈴木繁男旧蔵のバーナード・リーチの素描を、第3民芸館で展示しました。今回はこの素描についてご紹介します。

## 名古屋の医者 青井東平について

青井東平〔1900（明治33）年－1975（昭和50）年〕の名は、青井の友人の画家である三岸好太郎が1934（昭和9）年に急逝した際、そのデスマスクを制作したことで知られています。第二次大戦時には軍医として従軍し、戦後旧ソ連のエラブカ収容所に捕虜として収容、ここで東京工業大学化学科出身の人物と親しくなったことで、同大学薬業学科出身の島岡達三とも交友を結ぶようになりました。寄贈された「糠白釉コーヒー碗」は青井が所望して作ってもらった島岡の初期作品です。その後、名古屋民藝協会の立ち上げ（1956年10月25日発足）に尽力し、発足の際には、染色家・片野元彦と共に式に参加する柳宗悦や濱田庄司らの世話にあたり、その後も民芸関係者が来名する際に行程を共にしました。

名古屋民藝協会での活動は会報誌『名古屋民藝』を読み解くに留まりますが、片野とともに1959年頃まで常任理事に在任していたようです。本多静雄旧蔵の『名古屋民藝』第27号（1959年1月1日発行）役員名簿では、青井と片野の名前が鉛筆で消されており、その後の会員名簿等では片野の名前は一般会員として確認できるものの、青井は名前が出てこないため、その年内に片野は理事を辞任、青井は脱会したものと推察されます。この間に、青井は同会報誌第2号（1956年11月25日発行）に「猪口を集める」、第4号（1957年1月25日発行）に「浜田工房の半日」、また、『民藝』第52号（東京民藝協会、1957年4月1日発行）に「瀬戸周辺の民窯」を寄稿しています。

## バーナード・リーチ「ダーティントン・ホール」について

この絵は、青井が磐田の鈴木繁男を訪問した際、リーチの絵が欲しいと鈴木に相談して贈られた素描です。作品には「B.L. '38」とサインがあり、額縁裏の止め板には「A Dartinton (ママ) Hall 1939 B.L. To my friend Sujuki (ママ) Shigeo with so many happy memories 1954」（リーチ筆）と「盤田市（ママ）片野元彦と訪問 鈴木繁男兄より贈らる 昭和三十五年十月九日 青井東平」（青井筆）の記載があります。

リーチは1936年12月にダーティントンに移住し、翌年にダーティントン・ホール・トラストの一部門としてダーティントン製陶所を設立、1940年に長男デイヴィッドの兵役に伴いセント・アイヴスに戻るまでこの地に定住しました。また、ここでは1952年に、柳と濱田を招聘して講演したダーティントン国際工芸家会議が催され、世界で工業化が進む中での工芸の重要性が説かれました。そして、その年の10月から2月にかけて、柳と濱田を伴って実技と講演のためアメリカを巡り、その足で来日、1953年10月23日から11月2日の間と1954年6月中旬から6月28日の間には九谷に赴き、鈴木繁男を助手に磁器の上絵付けや工人への助言を行いました。

リーチが「手練の漆工」と称するように、鈴木は長年漆工芸をはじめとした諸々の仕事に携わってきました。1953年、鈴木は製陶への転向を思案するものの、柳には漆を続けるよう勧められていました。鈴木のような葛藤を汲み取ったのでしょうか、当初はリーチの助手を務めるはずだった布志名窯の船木研児が病気で来られなくなった際、柳と濱田が代役として鈴木が最上だと考えた『バーナード・リーチ日本絵日記』にあります。鈴木は、リーチの助手を務めたこの間に作陶家としての道を歩む決心をしました。

リーチは約1年9ヵ月の間日本に滞在し、1954年12月にイギリスへと戻りました。リーチにとって並々ならぬ思い入れのある場所を描いたこの絵を、「so many happy memories」の言葉と共に贈ったことは、助手を務めた鈴木への感謝はもちろん、今後への激励であったと思われます。そして、1960（昭和35）年10月にその絵を引き継いだ青井東平。一般人であるがゆえに、その後の青井の民芸関係での活動は、現在のところ河井寛次郎記念館開館に寄せた原稿（1973年頃／現時点非公開）以外で確認することができておりません。余談とはなりますが、磐田への訪問の時期と同じくして、片野は柳に示唆された藍染め復興のために藍建てに着手、鈴木は夏に念願の窯を青井の援助のもと自宅に築窯し、その冬に初窯を迎えることとなります。この絵を青井へと託した鈴木もまた、名古屋での民芸運動を支えた青井への労いと今後へのエールの気持ちを込めたのかもしれない。（岩間 千秋）

**参考文献** 『バーナード・リーチ日本絵日記』 講談社学術文庫 2002年  
『生涯120年バーナード・リーチ -生活をつくる眼と手-』 松下電工汐留ミュージアム 2007年  
『日本民藝館所蔵 バーナード・リーチ作品集』 株式会社筑摩書房 2012年  
開館30周年記念特別展「バーナード・リーチ」 展覧会リーフレット 豊田市民芸館 2013年  
『鈴木繁男 手と眼の創作』 日本民藝館 2024年



バーナード・リーチ「ダーティントン・ホール」1938年  
©The Bernard Leach Family. All rights reserved. DACS & JASPAR 2026 G4181



# 本多記念民芸の森から

## 2026年度 前期 イベント予定

### ○森の本多コレクション展「幻の壺と黒い壺－本多静雄のやきもの奇遇談－」

4月25日(土)～8月30日(日)

実業家である本多静雄が古陶磁研究者としても評価される所以となっているのが猿投古窯と渥美古窯の発見です。本展は本多の古陶磁研究の原点である2点を通して、やきものに向けられた深い眼差しを紹介します。

### ○初夏、森の手ざわり2026 本多記念民芸の森オープン10周年記念

5月24日(日) 小雨決行

NPO法人民芸の森倶楽部と共働で開催している「初夏、森の手ざわり」に加えて、民芸の森オープン10周年を記念して名古屋狂言共同社による、本多静雄の創作狂言「三国山」の公演を予定しています。また例年と同様に地域の皆さんを中心に展示や出演、飲食出店などを行います。※詳細は8頁をご確認下さい。

### ○森のアート展Vol.25

9月下旬～1月下旬(予定)

手仕事の素晴らしさを感じ、新たな発見や交流、創造の場となるよう芸術家等の作品を森の屋内外に展示する「森のアート展」を実施します。

## 2025年度 後期 イベントのふりかえり

### ○森のアート展Vol.23「多次元を露わにするArtist unit-NAGI 展」

7月15日(火)～9月15日(月・祝)

Artist unit-NAGIは、小原を拠点に制作活動を展開している青山禮士氏と神啓子氏のユニットです。

本展では、手漉き和紙や陶器などの伝統的な素材を用いた作品や、写真や絵画をベースにAIで生成させた画像をプリントした作品をとおして、現代社会における伝統と革新といった感覚を刺激し、未来に対する新たなビジョンを観る人たちに誘発する展示を行いました。



### ○民芸の森 観月会

10月4日(土) 来場者：約400人

昨年に引き続きNPO法人民芸の森倶楽部へ運営委託をして行いました。

雨が降るあいにくの天気で、予定していたステージイベントも急遽変更になりましたが、地元で活動する団体の舞台演奏などを楽しむ来場者の姿がありました。猿投台中学校美術部員が当日写生した作品や民芸館講座受講生等が作った絞り染めの行灯の展示は、民芸の森に調和していました。



### ○勘八峡紅葉ウォーキング

11月29日(土) 参加者：162人

今年は「勘八峡・秋色の絶景ポイントと史跡をめぐる」をテーマに民芸の森等を出発点として、越戸ダムをはじめとした勘八峡の各施設を巡る約4Kmのコースを設定してウォーキングを楽しみました。天候にも恵まれ、普段は入れない越戸ダムの上を歩くこともできるため、参加者から好評でした。

また猿投台中学校生ボランティアに受付などを協力してもらいました。



### ○森のアート展Vol.24「喉元を過ぎれば 岩井春華展」

1月10日(土)～3月15日(日)

岩井春華氏は、個人の多様な感覚の奥にあり、普段は気づくことのない人類共通の感覚や記憶をテーマとして作品を制作しています。

本展では、音や光、映像など五感で感じとる作品をとおして、人の感覚に潜む遺伝的、普遍的な要素を浮かび上がらせ、社会における個人のあり方や社会との結びつきを見つめ直すことを意図し、空間全体を体感するインスタレーション作品を展示しました。



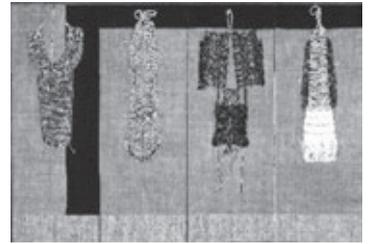
# 令和8年度(4月～令和9年3月) 展覧会のご案内 (観覧料 有料)

## ふたつのコレクション展

### 「芹沢銈介の仕事」筆と言葉 杉本健吉と本多静雄の交流」 第1・2民芸館

令和8年2月7日(土)～5月24日(日)

民藝運動を代表する作家のひとりであり、「型絵染」を確立した人間国宝・芹沢銈介。生誕130年を機会に、「芹沢銈介の仕事」と題し、館蔵の芹沢作品の中から優品を厳選して紹介します。また、同時開催として「筆と言葉 杉本健吉と本多静雄の交流」と題し、生誕120年を迎えた名古屋市出身の画家・杉本健吉の絵画をはじめ、杉本が手掛けた本多主催の茶会や創作狂言にまつわる作品など、二人の深い交流と文化活動に焦点をあてた展示を行います。



芹沢銈介「ばんどり図四曲屏風」

### 「アーツ・アンド・クラフツと民芸」 第1・2民芸館

6月20日(土)～8月30日(日)

19世紀後半にイギリスで始まったアーツ・アンド・クラフツ運動は、近代化の時流が生んだ先駆的な工芸運動です。アーツ・アンド・クラフツに始まる工芸への眼差しは、その後世界で同様の思想や運動が起こり、現代の私たちの生活様式や美意識に影響を与えています。第1部では、アーツ・アンド・クラフツ運動から生まれた工芸品をとおして、イギリスやアメリカなどで「生活に必要なものこそ美しくあるべき」と説いたウィリアム・モリスの眼差しを紹介し、第2部では、100年にわたって受け継がれた「民藝思想」を継承する工芸品をとおして、柳宗悦の「日常にこそ美が宿る」という思想が漂う作品を紹介します。



ウィリアム・モリス「格子垣」  
Photo © Brain Trust Inc.

### 「一挙公開 棟方志功」 第1・2民芸館

I期 2026年9月26日(土)～11月23日(月・祝)

II期 11月28日(土)～2027年1月31日(日)

日本民藝館は、棟方志功と柳宗悦が出会った1936年から柳が没する1961年までの25年間に制作された版画のほぼ全てを所蔵しています。棟方は初摺りの作品を2組ずつ柳に届けていて、その多くが柳の装案により掛け軸や屏風に仕立てられました。今回は、日本民藝館所蔵の棟方作品を「言葉のちから」、「敬愛のしるし」、「板のいのち」、「神仏のかたち」の4つのテーマに分類し、2期に分けて全容を紹介します。



棟方志功「鐘深頰 倭桜の柵」  
1945年 日本民藝館蔵

### 「これからの豊田市民芸館優品展(仮)」 第1・2民芸館

2027年2月27日(土)～5月23日(日)

豊田市民芸館は開館当初、実業家で古陶磁研究家であった本多静雄(1898—1999)の蒐集品を中心に展示を行い、その後、幅広い視点で衣食住にまつわる民芸資料の収集を行ってきました。

本展では、開館後40年にわたり民芸館が収集してきた民芸資料を概観するとともに、「型染鶴亀文三河万歳衣裳」19世紀その中から今後、豊田市民芸館の代表的コレクションとして発信していくべき資料を厳選して紹介します。また、民芸の森10周年と連動し、民藝への新たなまなごしを感じさせる特集展示を行います。



## 民芸館ギャラリー (第3民芸館)のご案内 (観覧料 無料)

令和8年5月17日(日)まで	……………	令和7年度民芸館講座作品展
6月20日(土)～	8月30日(日)……	アーツ・アンド・クラフツと民芸
9月26日(土)～	11月29日(日)……	公募期間
12月12日(土)～令和9年1月31日(日)……		郷土玩具展 干支と未
2月13日(土)～	5月16日(日)……	令和8年度民芸館講座作品展

この展示案内は、年間計画のため今後日程・内容等が変更となる場合があります。

